

鳥居

フォト劇場 (43)

写真が生まれるものがたり

祈願せしねぶた鳥居のまへを発つうとうやすかた
の杜のゆふぐれ

風張景一

戦時下のねぶた祭り。国民学校二年の夏、重
苦しい行列に交じり緊張しながら歩いた記憶
が残っている。仄暗く華やかさに遠いねぶた
は県社、善知鳥神社の鳥居の前を出発。昭和
十九年、戦勝祈願のねぶたであったと思う。

鳥居前の娘の白無垢の襟足がほのかに紅帯ぶいや
しげ吉事

田村悦子

結婚するのかもしれないのかやきもきさせた十年
余の長い交際を経て、このほど娘がゴールイ
ンする。今日は丹塗りの大鳥居の前で花嫁衣
裳を着て〈前撮り〉をした。晩婚の花嫁では
あるが、襟足は格段に美しく映えて見えた。



写真・木畑紀子

鳥の絵を木にかかげる遺跡にて風となりたる神
に逢ひたり
内藤丈子

どこの遺跡を訪ねた時だったか、鳥の絵を掲げた二本の木にふと出逢った。古来、鳥は神社の入口に立ち、神を守るとされたという。鳥居のその由来を知った時、古代の神々が風となり、我にどうつと吹いた気がした。

思ほえず君の手温しかしこみて鳥居をくぐりし遠
き婚の日
島本敏子

挙式の日、緊張で指先までうまく血が流れない程、カチカチに固くなっていた。鳥居の前で共に一礼し、歩み始めようとした時、すつと温かい手が重なり包んでくれた。あの日から六十年が過ぎる。